

平成17年度資源評価票(ダイジェスト版)

イカナゴ類

イカナゴ *Ammodytes personatus*

キタイカナゴ *A. hexapterus*

系群名 宗谷海峡

担当水研 北海道区水産研究所



生物学的特性

寿命: 6歳以上

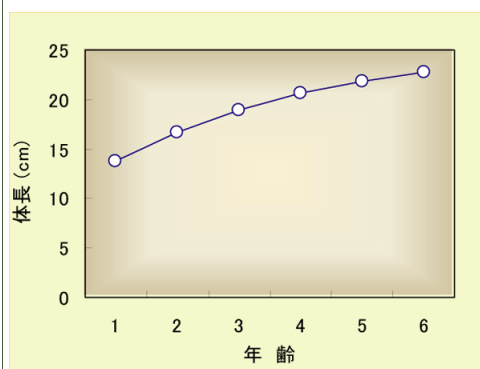
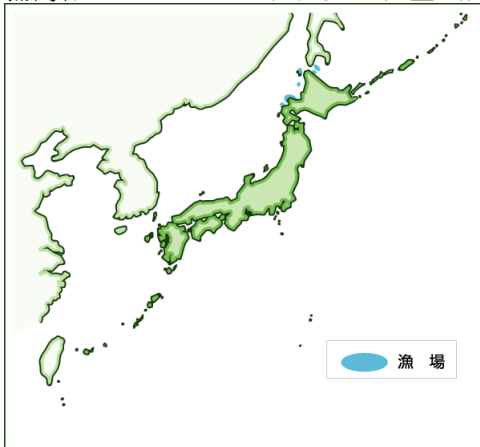
成熟開始年齢: 2歳

産卵期・産卵場: イカナゴは春季(3月下旬～5月下旬)で、稚内、枝幸および利尻礼文島周辺の沿岸域、キタイカナゴは初冬(11月下旬～12月)で、サハリン周辺の沿岸域

索餌期・索餌場: 主に宗谷海峡周辺の水深40～80mの砂礫地帯

食性: 未成魚はカイアシ類などの浮遊性甲殻類、珪藻類、成魚はカイアシ類、端脚類、オキアミ類、十脚類、矢虫類、魚類

捕食者: マダラなどの大型の魚類、海鳥類、海産ほ乳類

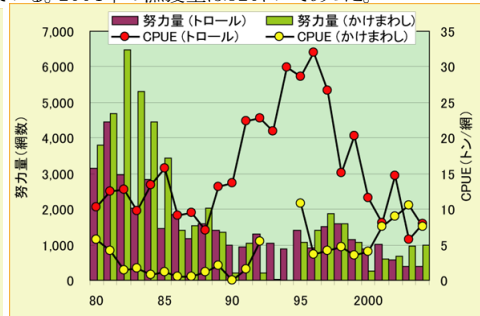
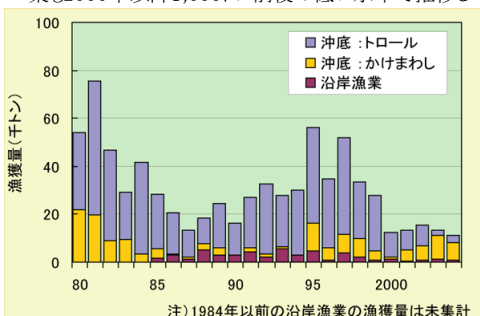


漁業の特徴

宗谷海峡周辺に分布するイカナゴ類には、イカナゴとキタイカナゴの2種が含まれているが、漁獲物ではこれらが区別されていない。漁獲物のほとんどは、沖合底びき網(沖底)によって漁獲されている。沖底は、6～10月に1～6歳魚を漁獲する。沿岸漁業は、主に4～7月に0～3歳魚を漁獲している。なお、沖底漁業は、ハマチの餌としての需要を考慮しながら行われる。

漁獲の動向

沖底の漁獲量は、1988年以降増加傾向を示し、1995年には51,700トンに達した。その後は減少傾向に転じ、2000年代に入ってから10,500～14,500トンと低い水準で推移しており、2004年の漁獲量は10,500トンであった。沿岸漁業も2000年以降1,000トン前後の低い水準で推移している。2004年の漁獲量は820トンであった。



資源評価法

主要漁業である沖底は、需要を考慮して行われるため、その漁獲量は資源水準を反映したものではないと考えられる。沖底のCPUEも、本資源が、日本水域とロシア水域とにまたがって分布しているため、資源全体の水準を反映しているかは不明である。さらに、減船、ロシア水域での漁獲割り当ての消滅、かけまわしとトロールの漁獲量の逆転などの影響で、近年ではCPUEから資源の水準、動向の判断を行うことが難しくなっている。

資源状態

資源量の適切な指標がなくなってきた。トロールの努力量がある程度の量を維持していた1990年代後半のCPUEは、まだ資源量を反映したものとみなして、この時期のCPUEの値と動向、近年の漁獲物体長組成などを総合して、水準は低位、動向は減少傾向と判断した。

管理方策

近年、漁獲物中に占める体長15cm未満の個体の割合が非常に少ないことから、イカナゴ類の資源水準の低下は、豊度の高い年級群が加入していないことによるものと考えられる。また、2003、2004年には体長15～20cmの個体もほとんど漁獲されなかったため、今後はさらに大型の高齢魚が主体の資源構成となり、資源状態の悪化が懸念される。このため、現状の漁獲努力を継続すると資源状態はさらに悪化する可能性が高いと判断される。このような状況の下、2004年からイカナゴが北海道における資源回復計画の対象種となり、稚内のトロール船2隻が減船された。

資源評価のまとめ

- 漁業構造の変化などにより、沖底のCPUEが資源の指標値として使えなくなっている
- 漁獲物体長組成から加入状況が悪いと判断



- 努力量の安定していた1990年代のトロールのCPUEの動向及び近年の漁獲物体長組成などを総合して、資源水準は低位、動向は減少傾向と判断

管理方策のまとめ

- 加入状況が悪く、現状の漁獲努力量の継続で、資源状態はさらに悪化すると考えられる
- 北海道は、2004年からイカナゴを資源回復計画の対象種とした

資源評価は毎年更新されます。
2005.12.13更新